

# 中学校社会科教科書の テキストの特徴

地理教科書の述語形式の分析を中心に

宮部真由美

## ◆要旨

**中**学校の社会科教科書（地理、歴史、公民）に用いられている日本語がどのようなものであるか、生徒が教科書をよむためにどのような困難点があるのかということをあきらかにするため、この論文では地理の教科書の述語形式に注目し、記述内容との関係について分析した結果を述べた。

地理の教科書には世界や日本の諸地域についての内容が一般的・習慣的なことからして記述されており、非過去形を用いて「超時」となることがらとして述べられていた。また、モノを主語とし、レル・ラレルの形の述語で述べる文も多く用いられていた。そのほか、名詞述語文がその段落を読むためのトピックとして用いられていることや、名詞と変化の局面を表わさない「なる」が組みあわさった場合と名詞述語で述べる場合との違いについて述べた。

## ◆キーワード

中学校社会科教科書、地理の教科書、述語、年少者日本語教育

## ◆ABSTRACT

This study focuses on the predicate forms that appear in geography textbooks in Japan to investigate what types of Japanese sentence are used and what difficulties are encountered while reading these textbooks.

It was found that geography textbooks contain general information describing Japan and other countries. These descriptions use non-past tense forms in the predicate, and the meaning of time is not limited. Many sentences appear in the passive form. Additionally, we found that the content of noun predicate sentences provides the topic for reading paragraphs. Moreover, the difference between predicates that combine a noun + *naru*, meaning a phase of a change, and another type of noun predicate was significant.

## ◆KEY WORDS

junior high school social studies textbook, geography textbook, predicate form, Japanese language education for children

## Linguistic Features of Predicate Forms at the End of Japanese Sentences in Japanese Junior High School Geography Textbooks

MAYUMI MIYABE

## 1 はじめに

日本語支援を必要とする中学生にとって、日本社会で生きていくことを考えると、高校へ進学することは重要な要素となる<sup>[註1]</sup>。そのためには日本語でコミュニケーションができるだけでなく、国語や数学などの教科学習の内容も理解できなければならない。しかし、教科学習の言語は、Cummins(1984)がBICS(Basic Interpersonal Communication Skills)とCALP(Cognitive/Academic Language Proficiency)という用語を用いて述べているように、場面や文脈の支えがないため抽象的で難しい。また、通常、子どもたちは初期の日本語学習を終えたあと、それよりも高度な教科学習の日本語を理解していかなければならず、困難がある。

先行研究では教科書の日本語は難しいという指摘はあるものの、具体的な研究の多くは語彙面に関するものである。こうした語彙面だけの指摘では具体的な教材開発の段階へつながっていないように思われる。教科書の内容を理解するために、教科書に書かれている文・文章を理解することが必要であることを考えると、単語を文にくみだてるための規則である文法の面からの分析も必要である。この論文では地理の教科書の文末の述語形式に注目し、どのような特徴があるのか、またどのような言語的な難しさがあるのかをみていく<sup>[註2]</sup>。

## 2 地理、歴史、公民の教科書

中学校の社会科は、地理、歴史、公民にわかれており、学ぶ学年が異なっている。1、2年生で地理と歴史、3年生で公民を学ぶ。そして、それぞれの教科書で扱う内容が異なることから、テキストの言語的な特徴に違いがみられる。(1)は地理の教科書、(2)は歴史の教科書、(3)は公民の教科書から引用した文章である。

- (1) 熱帯地域では、狩猟・採集の他、主食となるいも類や雑穀などが焼畑農業で栽培されています。砂漠の周辺では、らくだや羊、山羊などの家畜とともに草と水を求めて移動しながら生活する遊牧が行われています。

また、ナイル川などの流域や各地のオアシスなどでは、小麦やなつめやしなどを栽培する農業が行われています。(中学社会地理にまなぶ)

- (2) 鎌倉幕府をたおした後醍醐天皇は、天皇中心の新しい政治を始め(建武の新政)、武士の政治を否定し、貴族を重視する政策を採りました。このため、武士の間に不満が高まり、足利尊氏が武士の政治の復活を呼びかけ兵を挙げると、新政は2年ほどでくずれました。尊氏は京都に新たに天皇を立て、後醍醐天皇は吉野(奈良県)にのがれたので、二つの朝廷が生まれました。京都方を北朝、吉野方を南朝と呼び、この二つの朝廷は全国の武士に呼びかけて戦いました。(新編新しい社会歴史)
- (3) 裁判が公正・中立に行われるために、裁判所は国会や内閣などほかの機関から独立しています。これを司法権の独立とよびます。裁判官は自分の良心と憲法・法律にのみ従って裁判を行い、だれの指示や命令も受けません。また、裁判官の身分は保障されており、心身の故障か国会による弾劾裁判所での罷免、国民審査でしかやめさせられません。(社会科中学生の公民より良い社会をめざして)

地理の教科書では、世界や日本の自然環境や産業、人々の生活などについて記述されており、それらの多くは現在のことがらを中心に書かれている。そのため、(1)のように文末の述語には非過去形が多い。

歴史の教科書では、過去にあったできごとが記述されているので、(2)のように文末の述語は過去形が用いられる。

(1)の文章からわかるように、地理の教科書は記述の内容が現在のことがらであり、さらに写真などの資料が豊富に用いられていることから、生徒にとって記述の内容は具体的に想像しやすいものであるだろう。一方、(2)の歴史の教科書は、現在とは異なる過去のことがらやできごとが記述されている。生徒にとって自分の経験とは離れた過去のことがらであるため、教科書に当時の資料などが掲載されているものの、地理のように具体的に想像して理解することは難しいだろう。さらに、(2)では、「南北朝時代」についてその内容がわずか4文で記述されている。教科書の記述は歴史小説などとは違うため、生徒はとりあげられているできごとに関する背景などについて十分な説明がないま

ま、読み進めていかなければならない。

(3) の公民の教科書には、日本の政治、経済、日本国憲法、国際社会との関係などについて記述されており、こうした内容を通じて、現在の日本の社会のしくみについて学ぶ。地理の教科書と同様、非過去形を用いて現在のことがら記述されているが、「しくみ」について学ぶことから、それらを図解したものに関する説明も多く、難しさがある。また、政治や経済の単元などは、中学生にとってはまだ身近には考えづらい内容である。教科書は具体的な事例をあげて説明をするという構成になっているが、生徒に身近な事例でなければやはり抽象的な説明になってしまうと考えられる。

先に述べたように、中学校の社会科では、地理・歴史、公民の順に学ぶことになっており、この順番はこれらの教科書に対する理解の難しさにも対応していると思われる。さらに、教科書の言語的な難しさにも対応しているのではないだろうか。各教科書の言語的な難しさは文末の述語部分のみに現れるものではないが、1つの観点として、この論文では、文末の述語形式に注目し、次の節からは地理の教科書の特徴をみていくことにする。

### 3 分析の観点と方法

分析対象とした地理の教科は1年生の社会科で学習する科目である。教科書の体裁は写真や図、イラストが豊富に用いられているが、教科書に記述されている本文の内容を理解していくことが、この教科の内容理解に大きくかわっている。

地理教科書には世界と日本の諸地域別に気候や自然環境、経済、産業、人々の生活や文化などが記述されている。どの地域を述べる場合も基本的に述べられる項目が同じように構成されている。記述の内容は、現在の状況・状態を中心に書かれており、そのほかに過去にあったできごとやこれまでにどのような変化があったかなどが書かれている。そして、(4) のように諸地域の一般的・習慣的なことがらが述べられる。人物の記述も、歴史教科書のような個人の具体的なことがらではなく、その地域を代表するような行為・行動として記述されている。

- (4) イルクーツクは約60万人がくらす、大きな都市です。郊外では19世紀以前に建てられた木造の住居に住んでいる人もいますが、多くの方はコンクリート製のアパートや高層マンションに住んでいます。休日には郊外にある家庭菜園付きの小さな家(ダーチャ)へ出かける人もいます。ここでは、夏にだけ味わえる新鮮な野菜やじゃがいもを作りながら、短い夏の日差しを浴びて過ごします。(新編新しい社会地理)

こうした記述の特徴が文末の述語部分に現れていると考え、この論文では教科書の本文の文末の述語に注目して分析を行なった。また、述語となる単語の意味を知っていることは必須であるが、単語がどのような形で用いられているのか(シテイル形なのか、受身形なのか、など)という点も重要であると考え、分析では単語の形も考慮した。

分析では『社会科 中学生の地理 世界の姿と日本の国土』(帝国書院)、『新編新しい社会 地理』(東京書籍)、『中学社会 地理にまなぶ』(教育出版)の3つの出版社の教科書を用いた。分析のため、これらの教科書本文の文章を、1文ずつExcelの行に入力していった。その後、述語部分の単語を特定し同じ行の別のセルに入力し、さらにその単語の品詞、テンス、アスペクト、活用(受身形、使役形など)などの情報を追加し、分析のためのリストを作成した<sup>[注3]</sup>。文の数は先にあげた教科書の順に1,443、1,454、1,360、合計4,257であった。

### 4 述語の品詞について

述語の品詞分布は表1のようであった。文末の述語はほとんどが動詞述語であることがわかる。また、これらをテンス別にみたものが表2である。以下の節では、品詞別に述語の形式と記述の内容について述べていく。

表1 述語の品詞 (用例数と割合)

動詞	名詞	ナ形容詞	イ形容詞
3,752 (88.1%)	348 (8.2%)	136 (3.2%)	21 (0.5%)

表2 テンス別・品詞別の述語（用例数）

テンス	動詞	名詞	ナ形容詞	イ形容詞
非過去	2,792	313	131	21
過去	960	35	5	0

## 5 動詞述語

### 5.1 テンス・アスペクトの点から

文末の述語部分には、異なりで485語の動詞が用いられていた。表3に度数20以上の動詞を示す<sup>[註4]</sup>。

表3 度数20以上の動詞（降順）

1. なる (559)	9. 発達する (53)	17. 占める (30)	23. わかる (23)
2. ある (348)	10. 進む (52)	17. 分ける (30)	26. 集中する (22)
3. 見る (160)	11. よぶ (48)	19. 栽培する (26)	27. 生活する (22)
4. 行(な)う (156)	12. 進める (46)	20. 暮らす (25)	27. 異なる (21)
5. 広がる (100)	13. 発展する (45)	21. いる (24)	27. 使う (21)
6. 増える (92)	14. する (42)	21. 生産する (24)	27. 発生する (21)
7. 作る (69)	15. 利用する (32)	23. 訪れる (23)	31. 輸出する (21)
8. 言う (64)	15. 集まる (32)	23. 形成する (23)	31. 果たす (20)

述語の動詞をテンスとアスペクトの形で分類した内訳が表4である。

表4 テンス・アスペクト別の動詞述語（用例数）

スル	シテイル	シタ	シテイタ
1,123	1,669	914	46

表4からわかるように、非過去形ではスルよりも<sup>[註5]</sup>、シテイルの形が多く用いられている。(5)、(6)はシテイルが用いられている用例である。(5)ではフィジー人の暮らしのこと、(6)では日本の企業の本社の場所に関することが述べられており、いずれも現在の状況・状態が述べられている。また、これ

らは特定の人や企業のことでなく、現在一般的にみられる状況・状態を説明するものとして記述されている。

- (5) ビチレブ島の山の中には、フィジー人が住む集落が数多くあり、人々は自給自足に近い生活を送っています。<sup>(東京<sup>[註6]</sup>)</sup>
- (6) さまざまな機能の東京への一極集中が深まるなかで、大阪経済の占める地位は低下しています。<sup>(教育)</sup>

スルの形は通常、「今晚、母とカレーを作ります」のようにテンスの意味は未来を表わす。しかし、教科書では未来の特定の時間に成立するできごとを述べる場合よりも、(7)、(8)のようにスルの形で一般的・習慣的なこととして述べる文がほとんどであった。これらの文もシテイルの場合と同様、できごとがいつ成立するかには関係のないこととして述べられている。

- (7) 熱帯では四季がなく、昼間の気温が30℃近くまで上がる日が一年中続くので、人々は汗をすいやすく風通しの良い衣服で過ごします。<sup>(帝国)</sup>
- (8) 山々に降った雨や雪は川となり、太平洋と日本海へ注ぎます。<sup>(教育)</sup>

このようにスル、シテイルの形は現在や未来という具体的なテンスではなく、現在も含んだ「超時」として用いられる場合が多いことがわかる。

シタ、シテイタの形は、(9)、(10)のように過去のことがらを述べる場合に用いられる。

- (9) そして、森林を大規模に伐採して焼きはらい、牧場や、さとうきび、大豆の畑を広げました。<sup>(東京)</sup>
- (10) 北アメリカにはもともとネイティブアメリカンとよばれる先住民が住んでいました。<sup>(帝国)</sup>

過去のことがらを述べる文には、述語が(11)の「なりました」や、補助動詞シテクルと組みあわさった(12)の「～してきました」という形で、過去か

ら現在への変化を述べる文が多くみられた。シタ914例のうち、ナルの用例が191例、シテクルの用例が228例あり、過去の変化を述べる場合にこれらの形が多く用いられている。

- (11) また、鍛冶職人が集まった大阪の堺は、高品質の刃物の産地になりました。(東京)
- (12) 京都市の人口が増えるにつれて、街並みも変わってきました。(教育)

また、シテイタの形の(10)は過去のある状態を述べているが、一方でそれは現在はその状態ではないという含みがある。(13)のように段落全体から当該の文をみるとよくわかる。こうした含意は文章のなかでしか学べないため、生徒がこうした意味を理解できているか確認が必要だろう。

- (13) 19世紀半ばまで、情報は主に手紙で伝えられていました。その後、国際電話やインターネット、衛星放送などの普及によって、世界の情報通信網が著しく発達しました。現在では、電子メールなどの活用によって、時間や距離に関係なくすばやい情報のやりとりが、世界中で日常的に行われています。(東京)

## 5.2 ヴォイスの点から

文末の述語がレル・ラレルの形は925例、セル・サセルの形は10例あった。動詞述語文の約4分の1がレル・ラレルの形で用いられていることがわかる。度数上位(20以上)の語は「見られる(158)、行われる(115)、作られる(54)、進められる(35)、よばれる(33)、利用される(24)、言われる(22)、栽培される(20)、形成される(20)」であった。

(14)、(15)はレル・ラレルの形の用例である。初級教科書で学習する受身文は、はたらきかける人とはたらきかけられる人がかかわることがらについて、はたらきかけられる人を主語にして組みたてる文から学習する。しかし、地理は、(4)で述べたように特定の個人の行為を述べる教科書ではないため、

このようなヒトが主語の受身文は少なく、(14)、(15)のようなモノを主語とする受身文が多かった。また、その場合に行為者(動作主)が明示されている受身文は少なかった。

- (14) そして19世紀の初めには、コーヒーを栽培する大農場がつくられました。(帝国)
- (15) 華中・華南地方では、畑作中心の東北・華北地方に比べて、豊富な降水量があり温暖であることから稲作が中心で、各地でお茶も栽培されています。(教育)

これらの文ではモノ主語がどうなったのか(どうなっているのか)ということが説明されている<sup>[註7]</sup>。庵功雄(2018)で説明されているように、影響の受け手の方に関心がある(≡影響の与え手には関心がない<sup>[註8]</sup>)ため、影響の受け手を主語とする受身文が選択されている。

また、「～(ら)れています」(受身形のシテイル形)の形で用いられているものが477例あり、ほかにも「整備されてきました」、「注目されてきています」のような複雑な形もみられた。

(16)、(17)のように「見られる」「よばれる」「言われる」「分けられる」などは、可能・自発の意味で用いられている。これらの述語は、具体的な諸地域に関する説明ではなく、その箇所を学ぶためのメタ的な説明がなされる文に用いられていた。教科書の記述には地理的なことがらに関する記述とメタ的な説明がなされる記述があることにも注意が必要である。

- (16) 人口問題には、発展途上国と先進工業国とで大きなちがいが見られます。(東京)
- (17) さらに、ニュージーランドと太平洋の島々は、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアの三つの地域に分けられます。(帝国)

### 5.3 特徴的な動詞

「なる」や「する」の動詞はこれだけでは具体的な意味を表わさず、ほかの要素と組みあわせて用いられることが多い動詞である。表3で示したとおり、地理教科書では「なる」の使用が多く、ほかの要素と組みあわせた用例は名詞につづく場合（(18)、(19)）が227例、形容詞につづく場合（(20)、(21)）が136例、動詞につづく場合（(22)）が146例みられた。

- (18) 輸出を目的とした稲作もさかんで、タイやベトナムは世界有数の米の輸出国となっています。（帝国）
- (19) インダス川流域は、小麦とともにかんがいにより米も生産される穀倉地帯になっています。（帝国）
- (20) 21世紀に入り、ロシア連邦の経済は豊かになりました。（教育）
- (21) また、外国産のさまざまな農産物が輸入される今日、安い輸入農産物におされて、経営は厳しくなっています。（東京）
- (22) 航空機の利用が増えることにより、日本各地に地方空港が整備されるようになりました。（教育）

表1で示したように地理教科書ではイ形容詞が述語となる文は多くなかった。しかし、ここにあげたように、「多くなる（27）」「低くなる（17）」「高くなる（9）」「大きくなる（9）」「少なくなる（7）」「難しくなる（3）」「厳しくなる（3）」のような「なる」と組みあわせた形で用いられているものがあることがわかった。

## 6 名詞述語

### 6.1 テンスの点から

名詞述語は非過去形の例が大半であった。度数上位の7語は「地域（26）、もの（20）、特徴（16）、国（12）、こと（11）、中心（10）、特色（9）」であった。異

なりは182語であった。

述語・述部には文の主語についての説明が述べられている。文末の名詞を被修飾語とし、修飾部分が長くなるものが多い。そのため、述語名詞の意味に加え、修飾部分の内容を理解し、たとえば（23）、（24）ではどのような「地域」・「大陸」であるのかということを理解しなければならない。

- (23) 紀伊山地は、「吉野すぎ」や「尾鷲ひのき」などの良質な樹木が育ち、古くから林業が行われてきた地域です。（帝国）
- (24) 南アメリカ大陸は、日本から見ると地球の反対側にある大陸です。（東京）

### 6.2 特徴がみられた名詞

述語の名詞は普通名詞が多い。なかには「特徴です」「特色です」のような抽象名詞も用いられていた（(25)、(26)）。具体的な特徴や特色はガ格名詞（句）の部分に述べられている。

- (25) 中央高地は、海からはなれた内陸で標高も高いので、夏と冬、昼と夜の気温の差が大きいことが特徴です。（帝国）
- (26) 太平洋側は、一年を通じて温暖で、季節風の影響により夏の降水量が多いことが特色です。（教育）

また、「ものです」「ことです」のような形式名詞で終わる文もみられた（(27)、(28)）。形式名詞は辞書をひいてもこの文での意味はわからず、それぞれの文において表わす意味を理解する必要がある。

- (27) 南西諸島の海岸でよく見られる白い砂浜は、サンゴや貝がらなどが波にくだかれて細くなり、海岸にうち寄せられたものです。（帝国）
- (28) しかし、北海道の観光の問題は寒い冬の期間に観光客が減ることです。（教育）

## 7 形容詞述語

イ・ナ形容詞述語はほとんどが非過去形の例で、イ形容詞には過去形の例はみられなかった。属性形容詞が用いられており、動詞述語、名詞述語の非過去形の場合と同様、世界や日本の諸地域に関する状態・状況を説明する部分に用いられていた。

ナ形容詞は異なりでは24語みられた。度数が3以上は「盛ん(69)、重要(13)、温暖(9)、さまざま(6)、豊か(5)、大切(4)、有名(3)、一般的(3)、人気(3)」であった。ナ形容詞の延べ使用数の約半分は「盛ん」であり、地理の語彙全体でも使用数が多い語であった。盛んなこととして、(29)の「漁業」のほか、「造船業、林業、牧畜、稲作、小麦の栽培、露地栽培、農産物の生産、風力発電、海のレジャー、観光、物の往来、北九州との交流」など、具体的なものから抽象的なものまでさまざまなものがみられた。

(29) 大陸の東部にはビクトリア湖やタンガニーカ湖といった大きな湖が分布し、漁業がさかんです。(帝国)

地理に関する特徴を述べるための語彙が多いなか、(30)、(31)の「重要、大切」はそうした箇所を学ぶためのメタ的な説明を述べる文に用いられていた。

(30) また、国の経済を発展させるために、農産物や鉱産資源を外国に輸出して利益を得ることも重要です。(東京)

(31) 持続可能な社会を実現するには、限りある資源と環境を将来にわたって利用できるようにすることが大切です。(帝国)

次に、イ形容詞は全体で21例、内訳は「少ない(8)、ない(3)、大きい(2)、同じ(2)、厳しい(2)、珍しい(2)、長い(1)、多い(1)」であった。このうち15例は否定形で用いられており、「少ない」は8例とも否定形であった。こ

した否定形は単にその語を否定するだけでなく、(32)のように「少ない」ことを否定することで「結構多い」という意味を表わしている。こうした意味は文脈のなかで学ぶものであるため、生徒がきちんと理解できているか確認が必要である。

(32) 日本を代表する総合商社や銀行、デパートなどのなかには、大阪を創業の地とする企業が少なくありません。(教育)

## 8 名詞述語文の出現位置

4でみたように、地理教科書の約88%は動詞述語文で、教科書の大半の文が動詞述語文で記述されている。では、名詞述語文(8.2%)、形容詞述語文(3.7%)はどのような箇所に用いられているのだろうか、この節では用例数が348例あった名詞述語文についてみていくことにする。

(33) は「ペルーの人々の暮らし」という見出しがついた段落の内容である。具体名詞が述語である名詞述語文は、(33)のように段落の最初の部分に用いられ、当該の段落で何について述べるのかを示すものが多い。

(33) ペルーは、南アメリカ大陸の太平洋側に位置する、先住民が人口の半数近くを占める国です。アンデス山脈を中心に、東側はアマゾン川流域に盆地が広がり、西側は太平洋岸沿いに乾燥した狭い低地が南北にのびています。アンデス山脈やアマゾン盆地には主に先住民が暮らしています。(教育)

(34) の段落の見出しは「東京大都市圏の中の大都市、横浜」で、名詞述語文は段落冒頭から2文目であるが、大都市である横浜についてこの段落で述べることを表わしている。

(34) 東京大都市圏には、横浜市・川崎市・さいたま市・千葉市・相模原市

の五つの政令指定都市があります。なかでも横浜市は370万をこえる人々が暮らす、東京について人口が全国第2位の大都市です。江戸時代の終わりに開かれた港を中心に港町が形成されて以来、国際色豊かな都市として発展してきました。(帝国)

(35) は段落の中ごろに用いられた名詞述語文である。前後の文をみると、名詞述語文の次の文からは「瀬戸内工業地域」について述べられている。名詞述語文の前の文には「瀬戸内工業地域」を導入する内容が述べられている。

(35) 海上交通の便が良い瀬戸内海沿岸には、1960年代に広大な工業用地が整備され、さまざまな工業が発展しました。倉敷や福山には、鉄の精錬から製品の製造までを一貫して行うことができる製鉄所が、水島(現在は倉敷市)や徳山(現在は周南市)、新居浜などには石油化学コンビナートが建設され、一帯には当時最新鋭の工場が集まりました。このようにしてできたのが、瀬戸内工業地域です。ここで生産された工業原料は、瀬戸内海を利用して船で全国の工業都市に運ばれ、日本の経済成長を支えてきました。近年、瀬戸内工業地域では、携帯電話などに使われるリチウムイオン電池といった新しい工業製品が製造されています。(東京)

以上の例から、名詞述語文はその段落のトピックを示しており、教科書を読むための1つのガイドになることが示唆される。

5.3では「なる」が名詞などにつづく例をあげたが、ここでは名詞につづく「なる」と名詞述語の違い、そしてテキストとの関係について述べたい。「なる」には変化の局面を表わさない場合がある。佐藤琢三(1998)で述べられているように、5.3の(18)は変化の局面を表わしておらず、「タイやベトナムは……米の輸出国です」のように名詞述語に言い換えることができる。佐藤琢三(1998)はこのような「なる」は「推論的動的プロセス(推論世界)のあり方を叙述するものである」(p.112)と述べる。つまり、(18)では「当該の結論に意図的に至らしめた」(p.108)推論主体は背景化され、「必然的で客観性の高い結論

を導く」(p.109)ものとして記述されている。逆説的ではあるが、(18)の「米の輸出国となっている」は「米の輸出国です」と述べるのとは違い、他の部分や文脈からの推論的な余地が残された記述がなされているといえる。こうした認知的な面と記述形式との関係については今後も考察をしていきたいと考えている。

## 9 おわりに

本稿では地理の教科書の言語的な難しさを文末の述語形式に注目し、みてきた。地理の教科書では世界や日本の諸地域について具体的に述べられているものの、その地域の一般的・習慣的なことがらとして記述されており、非過去形を用いてテンスとしては「超時」となることがらが述べられていた。また、モノを主語とし、レル・ラレルの形の述語で述べる文も多く用いられていた。名詞述語文がその段落を読むためのトピックとして用いられていることや、名詞と変化の局面を表わさない「なる」が組みあわさった場合と名詞述語で述べる場合との違いについても述べた。

このような述語形式と記述内容との関連をすることは、教師や支援者にとって、生徒が教科書を読む際にどの部分に注意すべきか、どのような支援や教材作成をすべきかを考える基礎資料となると考える。たとえば、テンスに関しては、過去－現在－未来の時間と活用形の関係にくわえ、超時(一般的・習慣的な意味)とその活用形についても子どもたちは学ぶ必要があるだろう。また、受身文に関して、ヒトが主語となる受身文だけでなく、モノが主語となる受身文や行為者(動作主)を背景化する受身文についても学ぶ必要がある。8で述べたどの述語で表わすかによりテキストの記述に違いが生じるということをしておくことも有益だろう。今後は分析でわかったことを学習支援にいかし、教科書を読むため・理解するためにどのような教材が必要かということを考えていきたい。(鳴門教育大学)

## 注

- [注1] …… 義務教育期間が終わったのちには高校受験が控えている。志村ゆかりほか(2017)が述べるように、現代の日本において、子どもたちが将来に展望をもつために高校進学は重要なものであるといえる。
- [注2] …… この論文は志村ゆかり(2020)の考え方に基づいて行なった。
- [注3] …… 調べ学習をする単元は分析からはずした。
- [注4] …… 表3の動詞の表記は教科書の表記と一致しないものがある。
- [注5] …… スルの形にはシテイルの形をもたない「ある(336)、いる(21)」や、度数上位の「見る(154)」「なる(86)」「言う(51)」「分ける(29)」「よぶ(25)」が含まれる。ここにあげた動詞の後ろの数値はスルの形の数である。
- [注6] …… どの出版社からの引用であるかを示している。「帝国」は帝国書院、「東京」は東京書籍、「教育」は教育出版を指す。
- [注7] …… 次のように「農家の人々」のことに説明する場合は、それを主語にして述べられている。  
☆農家の人々は、自分たちの食べるいも類やバナナを栽培すると同時にカカオも栽培し、輸出しています。(帝国)
- [注8] …… 庵功雄(2018:18)では影響の与え手に関心がない場合に能動文を使うと、「Xが」を特定して述べないといけなくなると説明されている。

## 参考文献

- 庵功雄(2018)『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 佐藤琢三(1998)「自動詞ナルと計算的推論」『国語学』192,pp.13-24. 日本語学会
- 志村ゆかり(2020)「年少者(中学生)向けの日本語総合教科書の意義とその在り方—教科につなげるための日本語シラバス構築を目指して」『一橋日本語教育研究』8,pp.1-14. 一橋日本語教育研究会
- 志村ゆかり・志賀玲子・武一美・樋口万喜子・宮部真由美・永田晶子・頼田敦子(2017)「中学学齢期のJSL生徒を対象にした教科につなぐための日本語総合教科書の開発」『2017年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.348-353.
- Cummins,J(1984c) *Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. San Diego, CA: College-Hill.

## 中学校教科書(この論文で引用したもの、いずれも平成27年3月検定済教科書)

- 地理:『社会科 中学生の地理 世界の姿と日本の国土』(帝国書院)、『新編 新しい社会 地理』(東京書籍)、『中学社会 地理にまなぶ』(教育出版)
- 歴史:『新編 新しい社会 歴史』(東京書籍)
- 公民:『社会科 中学生の公民 より良い社会をめざして』(帝国書院)